

潜在項としての PRO

島 越 郎

1. はじめに

非定形節 (non-finite clause) には発音されない主語が存在し、その解釈は非定形節が生起する統語位置により異なることが知られている。生成文法においては、このような発音されない主語とその先行詞との関係をコントロールと呼び、コントロール関係を決めるメカニズムを明らかにすることが重要な問題の一つになっている。本稿では、コントロール関係を説明するために提案された、空の照応形に基づく Manzini (1983) の分析と空演算子移動に基づく Clark (1990) の分析の経験的妥当性を検証し、これらの分析には問題があることを指摘する。そして、代案として、Chomsky (2000, 2001) で仮定されているフェイズ理論に基づいて、非定形節の発音されない主語の解釈を決める新たな解釈条件を提案する。具体的には、非定形節の主語は統語構造が構築される統語部門では存在せず、統語構造がフェイズ単位に意味解釈部門に転送される段階で統語構造に導入される潜在項であり、その先行詞は転送される統語構造内に生起する名詞句であるという新たな仮説を提案する。

本稿の構成は次である。2 節では、コントロール関係に対する Manzini と Clark の先行分析を紹介し、その問題点を指摘する。3 節では、代案として、フェイズに基づく新たな解釈メカニズムを提案し、コントロール関係を説明する。4 節では、本稿で提案する分析を支持する更なる議論を提示する。5 節は纏めとなる。

2. 先行分析とその問題点

2.1 Manzini (1983) : 発音されない照応形

Manzini (1983) は、PRO を発音されない照応形 (anaphor) として分析する。照応形は束縛理論 A (Binding Theory A: BT (A)) に従い、照応形を含む統率範疇 (governing

category) 内で束縛されなければならない。次の対比を見てみよう。

- (1) a. Mary hoped [that John would impress himself].
 b.* John hoped [that himself would impress his roommates].

(1a, b) における himself は発音される照応形であり, BT (A) に従う。(1) における himself の統率範疇は, himself を統率する統率子 (governor) と himself にとって接近可能な主語を含む最小範疇 (minimal category) である。¹ (1a) の場合, 統率子は従属節内の動詞 impress, また, 接近可能な主語は従属節の主語 John である。その結果, (1a) の himself の統率範疇は従属節となり, 従属節内において himself は John に束縛される。従って, (1a) の himself は BT (A) を満たし, 文法的である。他方, (1b) の場合, 統率子は従属節内の屈折要素 INFL, また, 接近可能な主語は INFL 内の一致要素 Agr である。その結果, (1b) の himself の統率範疇は従属節となり, 従属節内において束縛されなければならない。しかし, himself は従属節内に先行詞を持たず, 束縛されない。従って, (1b) の himself は BT (A) に違反し, 非文となる。このように, 照応形の一環である himself は従属節内の主語に生起できない。

これに対して, 同じ照応形であるにもかかわらず, 発音されない PRO は従属節の主語として生起する。

- (2) John hoped [PRO to impress his roommates].

Manzini は, (1b) と (2) の違いを himself と PRO の統率範疇の違いとして説明する。(1b) とは異なり, (2) における従属節は PRO の統率範疇を形成しない。なぜなら, 従属節内の屈折要素 INFL は時制素性や一致要素を持たない不定詞であり, 不定詞は PRO の統率子と接近可能な主語にはならないためである。この場合, PRO を含む従属節が PRO の C 領域 (c-domain) を形成し, C 領域の統率範疇内で PRO は束縛されなければならない。² (2) において, PRO の C 領域である従属節の統率範疇は, 従属節の統率子である主節動詞 hoped と従属節にとって接近可能な主語である主節主語 John を含む文全体である。その結果, PRO は主節の主語 John により束縛され, PRO は BT (A) を満たす。

また、BT (A) に従って、PRO は必ず統率範疇内で先行詞を持たなければならない。次の用例を見てみよう。

- (3) a. John asked Bill [PRO to shave himself].
 b.* John asked Bill [PRO to shave oneself].
 c.* Mary said that John asked Bill [PRO to shave herself].

(Manzini (1983 : 423))

これらの文における PRO の統率範疇は、不定詞節を目的語として選択する動詞 ask が述語となる節である。そのため、(3a,b) では文全体が、また、(3c) では主節動詞 said の目的語である that 節が PRO の統率範疇となる。(3a) では、統率範疇である文全体において、目的語 Bill が PRO の先行詞となり、BT (A) が満たされる。その結果、PRO は不定詞節内の動詞 shave の目的語 himself の先行詞となり、文法的となる。他方、(3b) においては、不定詞節内の動詞 shave の目的語が oneself であることから、PRO は非特定の解釈されなければならない。このことは、PRO が文中の Bill や John を先行詞に取らないことを意味する。しかし、この場合、PRO は統率範疇である文中に先行詞を持たず、BT (A) に違反する。そのため、(3b) は非文となる。(3c) の非文も同様に説明される。不定詞節内の動詞の目的語が herself であることから、PRO は文頭の主語 Mary を先行詞に取らなければならない。しかし、Mary は PRO の統率範疇である that 節の外に生起する。その結果、(3c) における PRO は BT (A) に違反し、許されない。このように、不定詞節が動詞の目的語として生起する場合、不定詞節の主語である PRO は、不定詞節を選択する動詞が生起する上位の節内の要素を必ず先行詞に取る。Manzini の分析によると、この事実は、PRO が発音されない照応形であり、PRO の統率範疇が不定詞節を選択する動詞が生起する上位の節まで拡張すると仮定することにより説明される。

Manzini は、BT (A) に基づく PRO の分布と解釈の分析が、不定詞節が主語位置に生起する文にも適用できると論じている。

- (4) a. [PRO to behave oneself in public] would help Bill.
 b. [PRO to behave himself in public] would help Bill.

c. Mary knows that [PRO to behave herself in public] would help Bill.

(Manzini (1983 : 424))

(4a, b, c) における不定詞節内の動詞 *behave* の目的語である再帰代名詞に着目すると、これらの文の PRO は BT (A) に違反しているように見える。例えば、(4a) において、不定詞節内の動詞の目的語は *oneself* であることから、PRO は非特定の解釈され、文中に先行詞を持たないことが分かる。しかし、このような PRO の非特定の解釈は、不定詞節が動詞の目的語として生起する (3b) では許されない。Manzini の分析によると、(4a) と (3b) の違いは PRO の統率範疇の有無に原因がある。(4a) と (3b) の不定詞節自体は共に統率範疇にはならないが、不定詞節の上位の節が統率範疇になるかどうかで両者は異なる。(3b) では、不定詞節の統率子である主節動詞 *asked* と不定詞節にとって接近可能な主語である主節主語 *John* が存在するため、文全体が PRO の統率範疇になる。他方、(4a) の PRO の統率範疇は決まらない。なぜなら、PRO を含む不定詞節の統率子として屈折要素 *INFL* が存在するが、不定詞節自体が主語であるため、不定詞節にとって接近可能な主語が存在しないためである。その結果、PRO の統率範疇が決まらず、統率範疇内で束縛されることを要求する BT (A) が (4a) の PRO にはそもそも適用されない。そのため、(3b) とは異なり、(4a) の PRO は文中に先行詞を持つ必要が無く、(4a) は文法的となる。(4b) も同様に説明される。(4b) の PRO にも統率範疇が存在しないため、この PRO に BT (A) は適用されない。その結果、PRO を C 統御していない *Bill* を先行詞にとっても構わない。また、(4c) においても、*that* 節が PRO の統率範疇とならないため、*that* 節の外に生起する主節主語の *Mary* を先行詞に取ることができる。このように、PRO を発音されない照応形と考える Manzini の分析にとって一見すると問題になるように思われる (4) の用例も、PRO の統率範疇が存在しないために BT (A) が PRO に適用されないと考えることにより説明される。

以上、PRO を発音されない照応形と仮定する Manzini の分析を概観してきた。この分析によると、照応形の PRO は BT (A) に従うが、PRO の統率範疇が発音される照応形のそれとは異なる場合、両者は異なる振る舞いを示すことになる。そのため、この分析の下では、PRO と発音される照応形の統率範疇が構造的に同じになる時、両者は同じ振る舞いを示すと予測される。しかし、この予測は経験的に妥当ではない。次の用例を見てみよう。

- (5) a. John told Mary about himself/herself.
 b. John₁ told Mary₂ [PRO_{*1/2} to leave]. (Lasnik (1992 : 238))

(5a) において、照応形の一つである再帰代名詞の統率子は前置詞 *about* であり、また、再帰代名詞に接近可能な主語は文の主語の *John* である。そのため、この文における統率範疇は文全体であり、文中の要素に束縛されなければならない。その結果、主語 *John* に束縛される場合は男性形の *himself* が、また、目的語 *Mary* に束縛される場合は女性形の *herself* が生起する。(5a) に対応する (5b) においては、不定詞節が動詞 *told* の目的語として生起する。この文における *PRO* の統率範疇は、(5a) と同様に、不定詞節の統率子である動詞 *told* と不定詞節にとって接近可能な主語である *John* を含む文全体となる。そのため、BT (A) によると、*PRO* は文中の要素に束縛されなければならない。再帰代名詞と同様、*PRO* も照応形と仮定した場合、(5b) における *PRO* は主語と目的語の両方を先行詞に取れるはずである。しかし、実際には、目的語の *Mary* のみが *PRO* の先行詞として解釈される。そのため、(5a,b) の違いは、*PRO* を発音されない照応形と仮定する Manzini の分析にとって問題となる。

同様に、Manzini の分析は、潜在項 (implicit argument) に関する再帰代名詞と *PRO* の違いも説明できない (Rizzi (1986))。

- (6) a. John said something to them about themselves/each other.
 b.* John said something about themselves/each other.
 c. John said [PRO to speak about oneself/?themselves/?each other].
 (Rizzi (1986 : 550))

動詞 *said* の着点 (goal) を表す項である *to them* が生起する (6a) は文法的であるが、生起しない (6b) は非文である。この違いは、具体的な出来事を表す文において、文中に現れない潜在項は *themselves/each other* の先行詞として機能しないことを示す。他方、動詞 *said* の着点を表す項が生起しない (6c) は文法的である。(6c) の文法性は、*PRO* が不定詞節内の再帰代名詞の先行詞となり、*PRO* 自体は動詞 *said* の潜在項を先行詞に取ることを示している。Manzini の分析では、(6b) の *themselves/each other*、また、(6c) の *PRO* にとっての統率範疇は文全体であり、両者は文中において束縛されなければい

けない。(6c)では潜在項が PRO を束縛できるが、(6b)では themselves/each other を束縛できない。PRO も再帰代名詞も BT (A) に従う照応形であると仮定した場合、(6b,c)に見られる潜在項に関する違いがどのように説明されるのかが不明である。

更に、再帰代名詞と PRO は、分離先行詞に関しても異なる振る舞いを示す。具体的には、再帰代名詞は分離先行詞を取ることができないのに対し、PRO は分離先行詞を取ることができる。

- (7) a.* John talked with Mary about each other.
 b. John proposed to Mary [PRO to help each other].

(Koster and May (1982 : 138))

(7a)では、(5a)と同様、相互代名詞 each other の統率範疇は文全体である。そのため、BT (A) によると相互代名詞は文中の要素に束縛されなければならない。しかし、相互代名詞は主語 John と目的語 Mary の両方から同時に束縛されてはいけないため、(7a)は非文となる。(7a)の非文法性を踏まえると、(7b)における不定詞節内の each other も文中の John と Mary の両方から同時に束縛されないことになる。従って、(7b)の each other の先行詞は、不定詞節内の主語 PRO であり、この PRO が複数の意味を持つと考えられる。このことは相互代名詞とは異なり、PRO は統率範疇内において主語 John と目的語 Mary の両方から同時に束縛されていることを意味する。PRO と相互代名詞に見られるこの違いが、両者共に照応形であると仮定する Manzini の分析の下でどのように説明されるのかが問題になる。

以上、本節では、PRO を発音されない照応形と仮定し、その解釈を束縛理論 A により説明を試みる Manzini (1983) の分析を概観した。Manzini の分析は、先行詞の選択、分離先行詞や潜在項の可否に関する、再帰代名詞や相互代名詞と PRO の違いを説明できないという点で問題である。³

2.2 Clark (1990) : 空演算子移動

Clark (1990) は、PRO を値が未指定の空演算子 Null Operator (NO) として分析する。まず、一般的に NO が派生に含まれると考えられている次の文を見てみよう。

- (8) a. John₁ is easy [_{CP} Op₁ [_{IP} PRO to please t₁]].
 b. The book₁ was bought [_{CP} Op₁ [_{IP} PRO to read t₁ to the children]].
 c. A shovel₁ is [_{CP} Op₁ [_{IP} PRO to dig with t₁]]. (Clark (1990 : 158))

(8a) は不定詞節が形容詞 *easy* の補部に生起する *tough* 構文である。この構造では、NO が動詞 *please* の目的語から CP 指定部に移動し、CP 全体が一項述語 (one-place predicate) となる。述語の CP が主語の *John* と叙述 (predication) 関係を形成することにより、NO の値が *John* として解釈される。同様に、(8b) では不定詞節が目的を表す付加詞節として、また、(8c) では不定詞節が *be* 動詞の補部節としてそれぞれ生起し、不定詞節内の NO 移動により述語となった CP が主語と叙述関係を形成する。その結果、(8b) の *the book* は *read* の目的語として、また、(8c) の *a shovel* は *dig with* の目的語としてそれぞれ解釈される。

Clark は、NO 移動がコントロール構文にも含まれると提案する。この提案によると、(9a) は (9b) の構造を持つ。

- (9) a. John tried to enter the race.
 b. John₁ tried [_{CP} Op₁ [_{IP} t₁ to enter the race]] (Clark (1990 : 168-169))

(9b) の構造では、NO が IP 指定部から CP 指定部に移動する。この移動は、主節動詞 *try* の選択制限を満たすために義務的に適用される。つまり、*try* が補部に選択する非定形 CP の指定部には、NO が生起しなければならない。この移動により一項述語となった CP は、*try* の意味により、主節主語の *John* と叙述関係を形成する。その結果、*John* は *enter the race* の主語として解釈される。⁴

また、Clark の分析によると、(10a) のような副詞節内の発音されない主語と主節主語との関係も NO 移動で決まる。IP 指定部から CP 指定部への NO 移動を仮定することにより、(10a) は (10b) の構造を持つ。

- (10) a. John felt old after seeing himself in the mirror.
 b. John₁ felt old after [_{CP} Op₁ [_{IP} t₁ seeing himself in the mirror]]
 (Clark (1990 : 173))

(10b) の構造では、副詞節の CP が一項述語となり、主節主語の John と叙述関係を形成する。その結果、John が付加詞節内の seeing の主語として解釈される。副詞節内における NO 移動を仮定する証拠として、Clark は次の例文を挙げている。

- (11) a. John kissed Mary₁ [after she₁ saw herself in the mirror].
 b.* John kissed Mary₁ [Op₁ after t₁ seeing herself in the mirror].
 c. John₁ kissed Mary [Op₁ after t₁ seeing himself in the mirror].

(Clark (1990 : 172))

副詞節が定形節である (11a) では、副詞節内の主語 she は主節の目的語 Mary を先行詞に取ることことができる。他方、副詞節が非定形節の場合、(11b,c) の対比が示すように、副詞節内の発音されない主語は、主節主語として解釈され、目的語とは解釈されない。Clark は、この対比を叙述関係の観点から次のように説明する。まず、NO 移動により、副詞節 CP が一項述語となる。時を表す副詞節が主節主語とは相互 C 統御の関係にあるが、目的語とは相互 C 統御の関係にはないと仮定すると、CP と叙述関係を形成するのは主語 John である。その結果、副詞節 CP は目的語と叙述関係を形成せず、(11b) は許されない。

更に、Clark は、(8a) の tough 構文に対して次の構造を与えている。

- (12) John₁ is [_{AdjP} (∀x) [_{AdjP} easy x] [_{CP} Op₁ [_{IP} Op_x [_{IP} t_x to please t₁]]]]]

この構造には、動詞 please の目的語から CP 指定部に移動する NO 以外に、IP 指定部から IP に付加移動する NO が含まれる。CP 指定部へ移動した NO の値は、叙述関係により John と決まる。他方、IP に付加移動した NO の値は、叙述関係ではなく、解釈部門の LF において導入される普遍数量詞により決まる。この普遍数量詞は、IP 付加位置の NO を束縛するだけで無く、LF において構造上に現れる、形容詞 easy の潜在項も束縛する。その結果、please の主語は非特定の解釈を持つ。同様に、(8b,c) は次の LF 構造を持つ。

- (13) a. The book₁ was [_{VP} (∃x) [_{VP} bought t₁ x] [_{CP} Op₁ [_{IP} Op_x [_{IP} t_x to read t₁ to

the children]]]]]

b. $[_{IP} (\forall x) [_{IP} A\ shovel_1\ is\ [_{CP}\ Op_1\ [_{IP}\ Op_x\ [_{IP}\ t_x\ to\ dig\ with\ t_1]]]]]]]$

(13a) では、VP に導入された、受動文の潜在項である外項を束縛する存在数量詞が IP 付加位置の NO を束縛する。また、(13b) では、IP に導入された普遍数量詞が IP 付加位置の NO を束縛する。その結果、これらの不定詞節の主語は非特定の解釈を持つ。

不定詞節が主語に生起する場合も、NO は LF において導入される数量詞により束縛される。例えば、(14a) は、(14b) の LF 構造を持つ。

(14) a. To behave oneself in public is desirable.

b. $[_{IP} (\forall x) [_{IP} [_{IP}\ Op_x\ [_{IP}\ t_x\ to\ behave\ oneself\ in\ public]]\ is\ desirable]]]$

(14b) において、文レベルの IP に導入された普遍数量詞が、不定詞節を形成する IP に付加した NO を束縛する。その結果、不定詞節の主語は非特定の解釈を持つ。

このように、Clark は、非定形節内において NO が移動するという分析を提案している。NO 自体は意味を持たないため、他の要素と関係を持つ必要がある。Clark の分析によると、NO が認可されるためには、NO を含む非定形節が主節の要素と叙述関係を形成するか、または、NO 自体が数量詞により束縛されなければならない。

次に、Clark の分析にとって問題になると思われる用例を見ていこう。まず、次のような寄生空所構文における付加詞節の主語の解釈が問題になる。

(15) Which articles₁ did John file t₁ [without reading]?

(15) では、without により導入される副詞節内の主語と目的語が発音されない。Clark の分析によると、主語と目的語の位置には NO が基底生成され、目的語の NO は CP 指定部に移動するが、主語の NO は TP 指定部に留まる。

(16) $[_{CP}\ Which\ articles_1\ did\ John\ file\ t_1\ [without\ [_{CP}\ Op_1\ [_{IP}\ Op\ reading\ t_1]]]]]?$

(16) の構造では、副詞節内の CP 指定部に移動した NO は、主節の CP 指定部に移動し

た *which article* により束縛され、*wh* 疑問詞と同じ演算子として解釈される。問題は、主語位置に留まる NO である。副詞節内の CP 指定部には目的語から移動してきた NO が生起するため、主語の NO は副詞節内の CP 指定部に移動できない。その結果、副詞節全体と主節主語 *John* が叙述関係を形成できず、主語の NO を主節主語の *John* と解釈できない。そのため、Clark の分析は、(16) の寄生空所構文において、付加詞節内の主語が主節主語として解釈される事実を説明できない。

同様な問題が、不定詞節が主語位置に生起する次の文についても生じる。

(17) *Mary thinks that to make a film about herself would be profitable.*

(Clark (1990 : 137))

この文では、*that* 節内の文の主語に不定詞節が生起し、その不定詞節の主語が主節主語 *Mary* として解釈される。Clark の分析によると、(17) は次の構造を持つ。

(18) *Mary₁ thinks that* [_{CP} [_{CP} Op₁ [_{IP} t₁ *to make a film about herself*]]] *would be profitable*]

この構造では、不定詞節内において NO が IP 指定部から CP 指定部に移動し、その結果、不定詞節全体が一項述語となる。しかし、この一項述語は、主節主語の *Mary* と叙述関係を形成することができない。そのため、Clark の分析は、(17) の解釈を説明できない。

また、次の非文も Clark の分析にとって問題になると思われる。

(19)* *This article₁ was filed t₁ without reading.*

従来、(19) のような非文は、受身文を形成する A 移動は寄生空所を認可しないと仮定することにより説明されてきた。つまり、副詞節内の NO に値を付与できる要素は、A' 位置を占める疑問詞であると仮定されてきた。この仮定は Clark の分析においても採用されているが、この方法以外に叙述関係によっても NO の値が決まると Clark は仮定している。そのため、Clark の分析は、(19) に次の構造を付与する。

- (20)* This article₁ [_{VP} (∃ x) [_{VP} was filed t₁ x] [without [_{CP} Op₁ [_{IP} Op_x [_{IP} t_x reading t₁]]]]]]

この構造では、副詞節内の動詞 reading の目的語から CP 指定部に移動した NO により形成された一項述語が主節主語 this article と叙述関係を形成する。また、副詞節内の主語位置に基底生成された NO が IP に付加移動し、移動先で主節の潜在項を束縛する存在数量詞に束縛される。その結果、2つの NO の値が決まり、Clark の分析は (19) を文法的な文だと誤って予測してしまう。

更に、Clark の分析には、許されないコントロール関係を生成してしまう問題もある。(10) でも見たように、Clark の分析によると、副詞節内において NO が移動することにより副詞節全体が一項述語となり、副詞節と主節主語が叙述関係を形成する。その結果、副詞節内の発音されない主語は主節主語として解釈される。しかし、この分析は、次のような叙述関係も誤って認めてしまう。

- (21)* John₁ kissed Mary₂ [after [_{CP} Op₁ she₂ invited t₁ to the party]]].

この構造では、NO が動詞 invited の目的語から副詞節内の CP 指定部に移動している。この移動により、副詞節全体が一項述語となり、副詞節が主節主語の John と叙述関係を形成する。その結果、主節主語 John が副詞節内の動詞 invited の目的語として解釈されるが、この様な文は許されない。

同様な問題が (22) についても生じる。

- (22) a. Tom told Mary₁ [_{CP} Op₁ [_{IP} t₁ to be true to herself]]
 b.* Tom told Mary₁ [_{CP} Op₁ that John claimed [_{CP} t'₁ [_{IP} t₁ to be true to herself]]]

(22a) では、IP 指定部から CP 指定部への NO 移動より不定詞節である CP が一項述語となる。また、CP 自体は主節動詞 told の目的語である。そのため、動詞 tell の語彙特性により、一項述語の CP は主節目的語 Mary と叙述関係を形成する。このように Clark の分析は (22a) のコントロール関係を説明するが、同様な派生が (22b) についても許

されるはずである。つまり、不定詞節の主語位置に基底生成された NO が連続循環的移動により CP 指定部を経由して主節動詞 told が選択する CP の指定部まで移動できるはずである。従って、Clark の分析によると、(22b) では that 節全体が一項述語となり、Mary が不定詞節の主語として解釈されると予測される。しかし、このような解釈は許されない。このように、Clark の分析は、許されないコントロール関係も生成してしまう。

以上、本節では、PRO を値が未指定の空演算子として仮定し、その解釈を叙述関係や演算子束縛により説明する Clark (1990) の分析を概観した。Clark の分析は、副詞節や主語として生起する非定形節の主語の解釈を的確に捉えることができない点で問題である。

3. 代案：潜在項としての PRO

本稿では、非定形節の主語は、発音されない照応形や空演算子ではなく、統語部門から意味解釈部門である LF への転送 (transfer) 時に統語構造に導入される潜在項 (implicit argument) であると提案する。LF への転送時に導入された潜在項は意味解釈には寄与するが、音韻解釈部門である PF に存在しないために発音されない。また、導入される潜在項の解釈に関する条件として、島 (2018, 2019) で提案した次の条件を仮定する。

- (23) LF への転送時に導入された潜在項は、同一の転送領域内に変項を束縛する要素 A が存在する場合、A の変項 (variable) として解釈される。同一の転送領域内に潜在項を束縛する要素が存在しない場合、その値は未指定となる。

この条件によると、派生の途中段階で導入される潜在項の値はその段階で決まるが、値が決まらなくとも派生は破綻しない。派生の途中で値が決まらなかった潜在項に対しては、派生の最後の段階で値が決まる。

条件 (23) における転送領域については、統語部門において構造を構築する際の単位となるフェイズに基づいて決まる (Chomsky (2000, 2001))。具体的には、CP と vP 構造が構築された段階で、それぞれのフェイズ主要部である CP 主要部と vP 主要部の補部にある TP と VP 構造が転送領域を成す。また、転送領域を決めるフェイズに関して

次を仮定する。

- (24) 非定形節を形成する CP はフェイズではない。

この仮定の下では、動詞句の vP と定形節の CP がフェイズを形成する。

意味解釈部門において統語構造に導入される潜在項という考え自体は、Clark (1990) により既に提案されている。しかし、この潜在項の考えを非定形節の主語である PRO に適用する点において Clark の分析とは異なる。また、潜在項が含まれる局所的領域内に先行詞が存在する時にのみ潜在項の値が決まり、存在しない場合は値が決まらなると仮定する本稿の提案は、Manzini (1983) の考えに近い。つまり、非定形節の主語の解釈を決める条件が存在するが（本稿では (23) であり、Manzini の分析では束縛条件 A にあたる）、この条件が満たされない場合は別の方法で解釈が決まるという考えは基本的に同じである。しかし、解釈を決める際に重要な役割を担う局所領域が、現在の言語理論において独立に仮定されているフェイズに基づいている点において、本稿の分析と Manzini の分析は異なる。以下、本稿の提案する分析が経験的に妥当であることを検証する。

提案 (23) と (24) の仮定に基づき、まずは、非定形節が動詞の目的語として生起する場合の派生を考えてみよう。本論の分析によると、(25a) は派生の段階で (25b) の構造を持つ。

- (25) a. John hated to nominate himself.
 b. [_{VP} John v [_{VP} hate [_{CP} C [_{TP} to [_{VP} v [_{VP} nominate himself]]]]]]]

構造 (25b) は、主節の動詞句 vP が形成された段階である。この段階では、従属節の vP 指定部に外項は存在しない。(25b) における主節の VP が LF と PF への転送される。その結果、次の LF 構造が派生する。

- (26) [_{VP} hate [_{CP} C [_{TP} to [_{VP} x v [_{VP} nominate himself]]]]]]]

この構造では、不定詞節内の vP 指定部に値が未指定の潜在項 x が導入されている。(23)

の条件によると、(26)において潜在項 x を束縛する要素が存在する場合、 x の値が決まる。この場合、主節動詞 *hate* が選択する CP の主要部が変項 x を束縛すると仮定する (Kratzer (2009))。その結果、CP 全体が $\lambda x. [x \text{ nominate himself}]$ という一項述語として解釈される (Clark (1990))。CP 自体は主節動詞 *hate* の補部に生起するため、*hate* の語彙特性により、この一項述語の主語は主節主語の *John* として解釈される (Chierchia (1989))。

このように、非定形節が動詞の目的語として生起する場合、非定形節の主語である PRO の先行詞は、必ず主節動詞の項となる。そのため、(27) は許されない。

- (27) a.* *Mary's colleagues hated to nominate herself.*
 b.* *Mary realized that John hated to nominate herself.*

これらの文では、派生の途中で次の LF 構造が形成される。

- (28) $[_{VP} \text{ hate } [_{CP} C [_{TP} \text{ to } [_{VP} x \text{ v } [_{VP} \text{ nominate herself}]]]]]]$

(26) の場合と同様に、不定詞節内の vP 指定部に導入された潜在項 x は、CP 主要部により束縛され、CP 全体が $\lambda x. [x \text{ nominate herself}]$ として解釈される。*hate* の語彙特性により、この一項述語の主語は、(27a) では *Mary's colleagues*、また、(27b) では *John* として解釈される。しかし、不定詞節内の再帰代名詞 *herself* との人称が一致せず、これらの文は非文となる。

本稿の分析は、Manzini (1983) の分析にとって問題となる、PRO の先行詞が分離している場合や潜在項である場合も説明できる。本稿の分析によると、分離先行詞の用例である (29a) は (29b) の LF 構造を持つ。

- (29) a. *John proposed to Mary to help each other. (= (7b))*
 b. $[_{VP} \text{ proposed to Mary } [_{CP} C [_{TP} \text{ to } [_{VP} x \text{ v } [_{VP} \text{ help each other}]]]]]]$

(29b) の LF 構造では、不定詞節内の vP 指定部に導入された潜在項 x が CP 主要部により束縛され、CP 全体が $\lambda x. [x \text{ help each other}]$ として解釈される。この場合、主節動

詞 propose の語彙意味により、一項述語は主節動詞の動作主を表す主語と着点 (goal) を表す前置詞句の目的語の両方と叙述関係を形成すると仮定する。その結果、不定詞節の主語は、John と Mary の両方として解釈される。

また、潜在項が先行詞となる用例 (30a) は (30b) の LF 構造を持つ。

- (30) a. John said [to speak about oneself/?themselves/?each other]. (= (6c))
 b. [_{VP} said y [_{CP} C [_{TP} to [_{VP} x v [_{VP} speak about oneself/?themselves/?each other]]]]]]

(30b) の LF 構造では、不定詞節内の vP 指定部に導入された潜在項 x が CP 主要部により束縛され、CP 全体が λx . [x speak about oneself/?themselves/?each other] として解釈される。また、主節動詞の目的語位置には say の着点を表す潜在項 y が導入される。say の語彙意味により、主節動詞の着点を表す潜在項 y と一項述語が叙述関係を形成する。潜在項 y 自体は、存在数量詞により束縛されることにより非特定のな解釈を得るか、または、自由変項として文脈内の要素を先行詞とする。このように、本稿の分析は、PRO の先行詞が分離する場合や潜在項である場合も説明できる。

次に、非定形節が副詞節として生起する場合を考えてみよう。(31a) は、派生の段階で (31b) の構造を持つ。

- (31) a. Our son should apologize after embarrassing himself.
 b. [_{CP} C [_{TP} our son₁ should [_{VP} [_{VP} t₁ apologize] [_{CP} after [_{TP} -ing [_{VP} v [_{VP} embarrass himself]]]]]]]]

この構造では、副詞節を形成する CP が vP に付加し、主節主語の our son が vP 指定部から TP 指定部へ移動している。この段階では、副詞節内の vP 指定部に外項は存在しない。(31b) における主節の TP が LF と PF への転送され、次の LF 構造が派生する。

- (32) [_{TP} our son₁ should [_{VP} [_{VP} t₁ apologize] [_{CP} after [_{TP} -ing [_{VP} x v [_{VP} embarrass himself]]]]]]]]

この構造では、不定詞節を形成する vP 指定部に値が未指定の潜在項 x が導入されている。非定形節が動詞の目的語として生起する (26) の場合とは異なり、(32) における CP 主要部の after は vP 指定部に導入された x を束縛しない。なぜなら、(32) における CP は動詞に選択されないためである。そのため、潜在項 x を束縛する要素は主節主語の our son であり、 x は our son の束縛代名詞として解釈される。その結果、従属節内の動名詞の主語は、主節主語 our son として解釈される。

このように、非定形節が副詞節として生起する場合、非定形節の主語は主節主語の束縛代名詞となり、それ以外の要素を先行詞とすることができない。そのため、次の文は許されない。

- (33) a.* Our son should apologize after embarrassing ourselves.
 b.* Mary thought that our son should apologize after embarrassing herself.

(33b) における副詞節が that 節内に生起する場合、(33a,b) は次の LF 構造を持つ。

- (34) [_{TP} our son₁ should [_{vP} [_{vP} t₁ apologize] [_{CP} after [_{TP} -ing [_{vP} x v [_{VP} embarrass ourselves/herself]]]]]]]

この構造において、副詞節内の vP 指定部に導入された潜在項 x は、TP 指定部に移動した our son により束縛される。その結果、(23) の条件によると、変項の値は our son に決まり、不定詞節内の主語は our son として解釈される。しかし、副詞節内の再帰代名詞 ourselves とは数が、herself とは人称が一致しない。従って、(33a,b) は非文となる。

本稿の分析は、Clark (1990) 分析にとって問題となる寄生空所の現象も説明できる。

- (35) Which articles₁ did John file t₁ [without reading]? (= (15))

本稿の分析によると、(35) は、派生の段階で次の LF 構造を持つ。

- (36) [_{TP} John₁ T [_{vP} [_{vP} t₁ file which articles] [_{CP} OP₂ without [_{TP} -ing [_{vP} x v [_{VP} read t₂]]]]]]]

この構造において、副詞節内の vP 指定部に導入された潜在項 x は、TP 指定部に移動した John により束縛される。副詞節内の CP 指定部に移動した空演算子には束縛されない。なぜなら、空演算子が変項 x を束縛した場合、強交差 (strong crossover) 条件に違反するためである。空演算子自体は、その後の派生の段階で、主節の CP 指定部に移動する which article により束縛される。このように、本稿の分析は寄生空所の解釈も正しく捉えることができる。

最後に、非定形節が主語として生起する場合を考えてみよう。(37a) は、派生の段階で (37b) の構造を持つ。

- (37) a. We thought that to expose herself/ourselves would help Mary.
 b. $[_{CP} \text{that } [_{TP} [_{CP} C [_{TP} \text{to } [_{vP} v \text{expose herself}]]]]_2 \text{ would } [_{vP} t_2 v \text{help Mary}]]]$

構造 (37b) では、従属節内において、不定詞節を形成する CP が vP 指定部から TP 指定部に移動している。この段階では、不定詞節内の vP 指定部に外項は存在しない。(37b) における主節の TP が LF と PF への転送され、次の LF 構造が派生する。

- (38) $[_{TP} [_{CP} C [_{TP} \text{to } [_{vP} x v \text{expose herself/ourselves}]]]]_2 \text{ would } [_{vP} t_2 v \text{help Mary}]]]$

この構造では、不定詞節内の vP 指定部に値が未指定の潜在項 x が導入されている。非定形節が副詞節として生起する (32) と同様に、(38) における CP も動詞に選択されていないため、その主要部は潜在項 x を束縛しない。この場合、潜在項を束縛する要素は存在せず、(23) の条件によると、潜在項 x は自由変項として解釈される。潜在項の値は文脈により決まり、従属節内の目的語である Mary、または、主節の主語である we の両方が変項の先行詞となり得る。その結果、Mary を先行詞として解釈する場合は herself、また、we を先行詞とする場合は ourselves が不定詞節内の再帰代名詞として生起することになる。

以上、本節では、非定形節の主語は LF への転送時に導入される値を持たない潜在項であり、その値は構造構築の条件であるフェイズ条件に基づく (23) により決まるという分析を提案した。この分析は、Manzini (1983) の分析にとって問題となる分離先行詞や潜在項の現象、また、Clark (1990) の分析にとって問題となる寄生空所の現象も説

明できる。

4. 更なる考察：包括的コントロールと部分的コントロール

本節では、前節で提案した非定形節の主語解釈に関する分析の帰結として、包括的コントロール (Exhaustive control) と部分的コントロール (Partial control) の可能性について考察する。包括的コントロールでは、今まで見てきたように、非定形節を選択する主節動詞の項が非定形節の主語の先行詞として唯一的に解釈される。これに対して、部分的コントロールでは、非定形節を選択する主節動詞の項が非定形節の主語の先行詞の一部として解釈される (Wilkinson (1971))。

- (39) a. I tried drinking tepid tea.
 b. I regretted killing Sam. (Wilkinson (1971 : 575))

(39a) は包括的コントロールの用例で、動名詞節 *drinking tepid tea* の主語は主節主語の I のみを先行詞とする。一方、(39b) は部分的コントロールの用例で、主節主語の I は動名詞節 *killing Sam* の主語の一部に含まれる。このような部分的コントロールが可能であることは、次のような用例からも明らかである。

- (40) We thought that ...
 a. The chair preferred [to gather at 6].
 b. Bill regretted [meeting without a concrete agenda].
 c. Mary wondered [whether to apply together for the grant].
 d. It was humiliating to the chair [to disperse so abruptly].
 (Landau (2013 : 157))

これらの用例における括弧で示した非定形節の述語は、意味的に複数の主語を要求する述語である。そのため、非定形節の主語は、非定形節を選択する動詞の項以外に主節の主語 *we* も先行詞としなければならない。例えば、(40a) において、*the chair* のみを *gather at 6* の主語として解釈できない。この場合、*gather* の主語は *the chair* を含む主節

主語の *we* として解釈される。従って、(40a) の不定詞節の主語と *the chair* の間には部分的コントロールの関係が成立している。(40b-d) についても同様である。しかし、このような部分的コントロールは、全ての動詞が許すわけではない。

(41) *We thought that ...*

- a.* *John managed [to gather at 6].*
- b.* *The chair began [meeting without a concrete agenda].*
- c.* *Mary is able [to apply together for the grant].*
- d.* *It was rude of the chair [to disperse so abruptly].*

(Landau (2013 : 157))

(40) と同様に、これらの用例における括弧で示した非定形節の述語も、意味的に複数の主語を要求する述語である。しかし、(40) とは異なり、これらの文は非文である。この事実は、これらの文では部分的コントロール関係が成立せず、包括的コントロール関係のみが成立することを意味する。例えば、(41a) では、不定詞節を選択する動詞 *managed* の主語 *John* が不定詞節の主語として唯一的に解釈されるが、*John gathers at 6* は意味的に許されない。

このように、動詞の目的語として生起する非定形節においては、包括的コントロール以外に部分的コントロールが許される場合がある。部分的コントロールは、主語として生起する非定形節でも許されるが、副詞節として生起する非定形節では許されない。

(42) *John said that [meeting/gathering together at 6] would be fine with him.*

(Hornstein (2003 : 72, note 76))

(43) a.* *John saw Mary [after/without meeting/gathering at 6].*

b.* *John saw Mary early [(in order) to meet/gather at Max's at 6].*

(Hornstein (2003 : 43))

動名詞節が *that* 節内の主語として生起する (42) では、部分的コントロールが成立し、主節主語である *John* が動名詞節の主語の一部として解釈される。他方、非定形節が副詞節として生起する (43) では、部分的コントロールが成立せず、主節主語の *John* が

非定形節の主語として唯一的に解釈される。その結果, John が複数主語を要求する述語 meeting や gathering の主語にはなれず, (43) は非文となる。

以上, 非定形節が動詞の目的語や主語として生起する場合は部分的コントロールが成立するが, 副詞節として生起する場合は成立しないことを見てきた。以下では, この事実を前節で述べたフェイズに基づく非定形節の解釈条件により説明する。まずは, 非定形節が副詞節として生起する場合は部分的コントロールが許されない (43) の事実を考えてみよう。(43a) は, 派生の段階で, 次の構造を持つ。

- (44) [_{CP} C [_{TP} John₁ T [_{VP} [_{VP} t₁ saw Mary] [_{CP} after/without [_{TP} -ing [_{VP} v [_{VP} meet/gather at 6]]]]]]]]]

この構造では, 副詞節を形成する CP が vP に付加し, 主節主語の John が vP 指定部から TP 指定部へ移動している。この段階では, 副詞節内の vP 指定部に外項は存在しない。(44) における主節の TP が LF と PF への転送され, 次の LF 構造が派生する。

- (45) [_{TP} John₁ T [_{VP} [_{VP} t₁ saw Mary] [_{CP} after/without [_{TP} -ing [_{VP} x v [_{VP} meet/gather at 6]]]]]]]

この構造では, 不定詞節を形成する vP 指定部に値が未指定の潜在項 x が導入されている。(23) の条件によると, この潜在項 x を束縛する要素は主節主語の John であり, x は John の束縛代名詞として解釈される。その結果, 従属節内の動名詞の主語は主節主語 John として解釈されるが, 複数名詞を主語に要求する meet/gather とは意味的に抵触する。そのため, (43a) は非文となる。(43b) についても同様な説明が成り立つ。

次に, 部分的コントロールを許す, 非定形節が主語として生起する (42) を考えてみよう。この文は, 派生の段階で, 次の構造を持つ。

- (46) [_{CP} that [_{TP} [_{CP} C [_{TP} -ing [_{VP} v meet/gather at 6]]]] would be fine with him]]]

この構造では, 動名詞節内の vP 指定部に外項は存在しない。(46) における TP が LF と PF への転送され, 次の LF 構造が派生する。

(47) $[_{TP} [_{CP} C [_{TP} \text{-ing} [_{vP} x v \text{meet/gather at 6}]]]] \text{ would be fine with him}]$

この構造では、動名詞節内の vP 指定部に値が未指定の潜在項 x が導入されている。この潜在項を束縛する要素は存在しない。そのため、(23) の条件によると、x は自由変項として解釈される。この場合、変項の値は文脈により決まり、主節主語の John を一部に含む複数名詞として解釈される。その結果、(42) は文法的となる。

最後に、非定形節が動詞の目的語として生起する (40) と (41) の事実を考えてみよう。部分的コントロールを許す (40a) は、派生の段階で次の構造を持つ。

(48) $[_{vP} \text{the chair } v [_{vP} \text{prefer} [_{CP} C [_{TP} \text{to} [_{vP} v [_{vP} \text{gather at 6}]]]]]]]]]$

この構造では、不定詞節内の vP 指定部に外項は存在しない。(48) における主節の VP が LF と PF への転送され、次の LF 構造が派生する。

(49) $[_{vP} \text{prefer} [_{CP} C [_{TP} \text{to} [_{vP} x v [_{vP} \text{gather at 6}]]]]]]]$

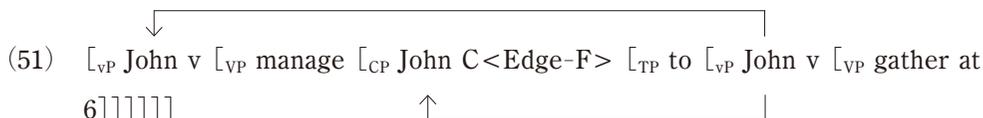
この構造では、不定詞節内の vP 指定部に導入された潜在項 x が主節動詞 prefer が選択する CP 主要部に束縛され、CP 全体が $\lambda x. [x \text{gather at 6}]$ という一項述語として解釈される。この場合、主節動詞 prefer の語彙特性により、主語 John を一部として含む複合名詞がラムダ演算子に代入されると仮定しよう。その結果、(49) は的確な意味表現として解釈される。(40b-d) についても、同様な分析が成り立つ。

他方、部分的コントロールを許さない (41) では、動詞が選択する CP の主要部には端素性 (edge feature) が存在すると仮定しよう。例えば、(41a) は、派生の段階で次の構造を持つ。

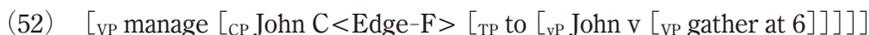
(50) $[_{vP} v [_{vP} \text{manage} [_{CP} C \langle \text{Edge-F} \rangle [_{TP} \text{to} [_{vP} \text{John } v [_{vP} \text{gather at 6}]]]]]]]]]$

この構造では、主節動詞 manage が選択する CP 主要部は端素性を持ち、この素性を LF と PF への転送前に消さなければならない。この素性を消す要素として、不定詞節内の vP 指定部には John が基底生成される。John は、CP 主要部の端素性を消すために CP

指定部に移動するが、この移動操作と同時に、主節の vP 指定部に移動する (Chomsky (2008))。



John が主節の vP 指定部に移動することにより、John は主節動詞 manage の主語として解釈される (Hornstein (1999, 2003))。vP 指定部が項が生起する A 位置で、CP 指定部が A' 位置にあたる。そのため、(51) における不定詞節内の vP 指定部から主節の vP 指定部への移動は A 位置から A 位置へ移動、また、不定詞節内の vP 指定部から不定詞節内の CP 指定部への移動は A 位置から A' 位置への移動となる。両方の移動操作とも、A 位置から A' 位置への不適格な移動ではない。(51) の主節 VP 構造が LF と PF への転送される。



PF では、CP 指定部と vP 指定部にある John が削除される。また、LF では、John が述語 gather at 6 の主語となるが、この LF 構造は意味的に不適格な構造として解釈される。(41b-d) についても同様に分析できる。このように、(41) におけるコントロール関係は、不定詞節内の vP 指定部から不定詞節を選択する動詞句を形成する vP 指定部に名詞句が移動することにより成立する。そのため、これらの文において部分的コントロールの解釈は許さない。

なお、このような不定詞節内の vP 指定部から不定詞節を選択する vP 指定部へ移動操作は、不定詞節内の CP 主要部が端素性を持つ場合に限られる。(40a) のような端素性を持たない CP 主要部を選択する動詞の場合、このような移動操作は許されない。(40a) を移動で派生する場合、派生の段階で次の統語構造が形成される。



この構造における CP 主要部は端素性を持たない。そのため、不定詞節内の vP 指定部

にある the chair が主節の vP 指定部に移動するが、この移動と同時に the chair が不定詞節内の vP 指定部から CP 指定部には移動しない。

(54) [_{VP} the chair v [_{VP} prefer [_{CP} C [_{TP} to [_{VP} the chair v [_{VP} gather at 6]]]]]]

この構造に転送が適用し、次の LF と PF 構造が派生する。

(55) [_{VP} prefer [_{CP} C [_{TP} to [_{VP} the chair v [_{VP} gather at 6]]]]

PF では、(55) の the chair が削除される。他方、LF では、主節動詞 prefer により選択された CP の主要部がその補部内に変項を見つけ、束縛しなければならない。しかし、不定詞節内の vP 指定部にある the chair は変項として機能しない。そのため、(55) の LF 構造は破綻する。このように、部分的コントロールを許す (40a) を移動操作により派生することはできない。

以上、本節では、包括的コントロールと部分的コントロールの違いについて考察した。副詞節として生起する非定形節は部分的コントロールを許さない。これは、非定形節の主語である潜在項と同じ転送領域にある、副詞節が修飾する節の主語が潜在項の先行詞として包括的に決まるためである。また、主語として生起する非定形節は部分的コントロールを許す。この場合、潜在項と同じ転送領域内に先行詞は存在せず、潜在項の解釈は文脈により決まる。更に、非定形節が動詞の目的語として生起する場合は、非定形節を選択する主節動詞の特性により部分的コントロールの可能性が決まる。(40) に示される部分的コントロール許す動詞群では、補部を選択する CP の主要部は LF において変項を束縛することにより、部分的コントロールが可能となる。他方、(41) に示される部分的コントロールを許さない動詞群では、補部を選択する CP の主要部は端素性を持ち、PF/LF への転送前に照合により消す必要がある。そのため、(41) では動詞の目的語である非定形節内から主節の vP 指定部に名詞句が移動し、部分的コントロールは許されない。

5. ま と め

本稿では、非定形節内の発音されない主語の意味解釈に関するコントロール現象について考察した。まず、非定形節の主語を発音されない照応形と仮定し、主語の解釈を束縛条件 A により説明する Manzini (1983) の分析を概観し、その問題点を指摘した。また、非定形節内に空演算子の移動を仮定し、コントロール関係を叙述関係により説明しようとする Clark (1990) の分析を概観し、その問題点を指摘した。その後、代案として、Chomsky (2000, 2001) で仮定されているフェイズ理論に基づく新たな解釈条件を提案した。本稿の分析によると、非定形節の主語は統語部門から意味解釈部門への転送時に導入される潜在項であり、その値は構造構築の条件であるフェイズ条件に従って決まる。具体的には、新たに導入される潜在項と同一の転送領域内の要素を先行詞とするが、そのような先行詞が存在しない場合は、潜在項の値は文脈により決まる。また、本稿の分析の更なる帰結として、包括的コントロールと部分的コントロールの可能性についても考察した。

注

* 本稿の一部は日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究（C）課題番号 17K02803）の援助を受けている。

1) 統率範疇、統率、接近可能な主語は、(i), (ii), (iii) のようにそれぞれ定義されている (Manzini (1983: 422))。

- (i) γ is a governing category for α iff
 - a. γ is the minimal category containing α , a governor for α , and a subject accessible to α ;
 - b. γ is the root sentence, if not (a) and α is governed.
- (ii) α governs β iff
 - a. α is a lexical category, and
 - b. α and β c-command each other.
- (iii) α is accessible to β iff
 - a. α c-commands β , and
 - b. coindexing of α and β does not violate the i-within-i condition.

また、上記 (iiib) における i-within-i 条件は次のように定義される。

- (iv) * $[_\delta \dots \alpha \dots]$, where δ and α are coindexed.

- 2) 統率範疇を持たない照応形の BT (A) は次のように定義される。
- (i) An anaphor without a governing category is bound in its domain-governing category.
 - (ii) γ is a domain-governing category for α iff
 - a. γ is a governing category for the c-domain of α , and
 - b. γ contains a subject accessible to α . (Manzini (1983 : 424))
 - (iii) γ is the c-domain of α iff
 - γ is the minimal maximal category dominating α . (Manzini (1983 : 422))
- 3) Manzini (1983) 以外に, Lebeaux (1984, 1985), Bouchard (1985), Koster (1984, 1987), Hornstein and Lightfoot (1987) 等々が PRO を発音されない照応形として仮定する分析を提案しているが, 何れの分析にも本節で指摘した問題がある。
- 4) Clark (1990 : 168) によると, (9a) における動詞の補部にある要素と動詞の主語との叙述関係は, コントロール述語に限定されるものではなく, 次のような文にも見られる。
- (i) a. [_{NP} John]_i [_V looks] [_{AP} ill]_i
 - b. [_{NP} Bill]_i [_V became] [_{NP} a logical positivist]_i
 - c. [_{NP} Frank]_i [_V grew] [_{PP} into a sorry example of mankind]_i

これらの文では, 下付文字により叙述関係が示されている。例えば, (ia) では, 動詞 looks の補部に生起する形容詞 ill が主語の John と叙述関係を形成する (Williams (1980))。

参 考 文 献

- Bouchard, Denis (1985) "PRO, Pronominal or Anaphor," *Linguistic Inquiry* 16, 471-477.
- Chierchia, Gennaro (1989) "Structured Meanings, Thematic Roles and Control," In *Properties, Types and Meanings II*, ed. by Gennaro Chierchia, Barbara Partee and Raymond Turner, 131-166, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries : The Framework," *Step by Step : Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale : A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases", In *Foundational Issues in Linguistic Theory : Essay in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carles P. Otero, and Moria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Clark, Robin (1990) *Thematic Theory in Syntax and Interpretation*, London : Routledge.
- Hornstein, Norbert (1999) "Movement and Control," *Linguistic Inquiry* 30, 69-96.
- Hornstein, Norbert (2003) "On Control," In *Minimalist Syntax*, ed. by Randall Hendrick, 6-81, Oxford : Blackwell Publishing.
- Hornstein, Norbert and David Lightfoot (1987) "Predication and PRO," *Language* 63, 23-52.
- Kratzer, Angelika (2009) "Making a Pronoun : Fake Indexicals a Windows into the Properties of Pronouns,

- Linguistic Inquiry* 40, 187-237.
- Koster, Jan (1984) "On Binding and Control," *Linguistic Inquiry* 15, 417-459.
- Koster, Jan (1987) *Domains and Dynamics*, Dordrecht : Foris.
- Koster, Jan and Robert May (1982) "On the Constituency of Infinitives," *Language* 58, 117-143.
- Landau, Idan (2013) *Control in Generative Grammar*, New York : Cambridge University Press.
- Lasnik, Howard (1992) "Two Notes on Control and Binding," In *Control and Grammar*, ed. by Richard K. Larson, Sabine Iatridou, Utpal Lahiri and James Higginbotham, 235-251, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Lebeaux, David (1984) "Anaphoric Binding and the Definition of PRO," In *Proceedings of North Eastern Linguistic Society* 14, ed. by Charles Jones and Peter Sells, 253-274, UMASS, Amherst, MA : GLSA Publications.
- Lebeaux, David (1985) "Locality and Anaphoric Binding," *The Linguistic Review* 4, 343-363.
- Manzini, M. Rita (1983) "On Control and Control Theory," *Linguistic Inquiry* 14, 421-446.
- Rizzi, Luigi (1986) "Null Objects in Italian and the Theory of *pro*," *Linguistic Inquiry* 17, 501-557.
- 島 越郎 (2018) 「コントロールとフェイズ」『東北大学文学研究科研究年報』 67号, 1-19, 東北大学大学院文学研究科
- 島 越郎 (2019) 「コントロールの移動分析とその問題点」『東北大学文学研究科研究年報』 68号, 137-158, 東北大学大学院文学研究科
- Wilkinson, Robert (1971) "Complement Subject Deletion and Subset Relations," *Linguistic Inquiry* 2, 575-584.
- Williams, Edwin (1980) "Predication," *Linguistic Inquiry* 11, 203-238.

PRO as Implicit Arguments

Etsuro SHIMA

Missing subjects of nonfinite clauses display different properties, depending upon syntactic positions of those clauses. When they appear in complements of verbs or as adjuncts, their subjects are interpreted as arguments of the clauses immediately containing the nonfinite clauses. In contrast, if nonfinite clauses appear as subjects, the antecedents of their subjects need not be grammatical elements: they can be interpreted contextually or generically. In generative grammar, the dependency between missing subjects and their antecedents is called control and various approaches to control have been proposed. In this paper, I will critically review two previous approaches to control: one is proposed by Manzini (1983) who regards missing subjects of nonfinite clauses as empty anaphors that is subject to Binding Condition (A). The other is presented by Clark (1990) who claims that nonfinite clauses involve movements of empty operators which are identified under predication or A'-binding. I will point out their empirical problems and then propose an alternative analysis of control within the framework of Chomsky's (2000, 2001) phase-based theory of syntax. I claim that missing subjects of nonfinite clauses are kinds of implicit arguments that are introduced into syntactic representations and are given their antecedents in the course of the operation of Transfer that sends syntactic objects formed in the syntax to the semantic component.